

「豊の国塾」長

県は「豊の国塾」を今年からやめるらしい。行政主導の塾では塾の本質が失われる。塾とは、土をつき固めたものという語源に由来するように、在野性と自主独往をその本性とし、時に体制批判を本質とする。

塾といえ、大分県人でなくても、慶応義塾、福沢諭吉を連想するだろう。自主独往は福沢の信条であり、自伝にはその生き方が随所に横溢（やういっ）している。彼はお金と名譽と権力に動かされないことを、人生目標とした。「借金ほど怖いものはない」と強く自戒。やつと妻子を養えるようになって、「どうやら人に不義理をせず、頭を下げぬようにして衣食さえ出来れば、大願成就（じやうじゆ）」と、胸をなで下ろしている。全くの凡人である。

だから、救国の大志など初めからあったわけではないとも言う。ただ、おかれた貧しい運命を本気で切ひらく、痛ましい程のその連続であった。アメリカ渡航だって、単なる「従僕（じゆうぼく）」の身にすぎなかつたが、その異常な体験を、『西洋事情』として出版

した。そこが他と違う。彼は権力にこびない実践家だった。

たまたまその著書が日本開国という好機に遭遇し、好評を博す。彼は自分の考えを自分の舌とペンで主張する意味を、ここでようやく自覚する。日本を新文明国にせんとの「第二の成願」を立てるのである。「その願が天の恵み祖先の余徳によって首尾よくかのうことになれば、私のために第二の大願成就と言わねばならぬ」。彼はこのように謙虚であり、しかも、意気高らかでもあった。権勢に阿おもねらず、自己の実質を信じ、第一、第二の誓願の順序をわきまえていたから。凡人ながらの非凡の道である。某日、某人の名刺を頂いた。肩書に「××豊の国塾長」とあった。役所任命の塾長だから特に名誉と思ったのであろうか。ああ。

(一九八八年六月二十日)